で遊べたのですから、あるいは雨に感謝すべきなのかもしれません。

*3日、雨はあがりました。してみるヒ田年生のどなたかが雨降り女だという決論がでます。さてこの日は今まで使われずに足手まといたほっていたボーリング、ステツキが脚光を浴びました。ほとんどの着がこの時初めて使ったさればなかなりの変嬌苔でした。偶然(でもないでしょうが)真上からハンマーが落ちると気嫌よく入り、いくら力をいれても頭を横に引って全然いうことを即かなかったりするのです。「先生、この色は黒褐灰緑黄色ですがっ」など理解に苦しむ原向が出たりしました。わずかの暦も見客してはならない科学的態度を食之たのは大牧復でしよう。そして一番の驚きは平野の地形の微妙さでした。この日も幾つかの露頭を見たり、かつての宿場町や河岸を見たりするのに自動車とは大活躍をしてくれました。東に日光までドライヴでき、一同、自動車と運転手さんに風謝しています。

型9月 10日、東照宮を観ていない着があったため朝ノ時間自由時間になりました。いろいろ観たい所があり「残念!雨がザアザア降ればいいのに」と思かないでもありませんでした。ところがその気持が通じたわけでもないでしようが、バスに乗った頃から降り出しました。しかしかし水降りになったので放く日の予定は変更せずに、雨中の大行進"は開始されました。時間にすれば3時間足らずだったでしよう。その周雨拓農家で聞き込みをしたりして、ついに例幣便街道に出ました。その時はかなからずホッとしました。足地の中を泳ぐし、ズボンの多以下はビショビショ、正しく三度としたくない恰好でした。その街道をちよっとはずれた前にすごい観物がありました。昭和24年の今市地震時の断層が何本がはつきり観られたのです。何しろはっきりした今市、廃沼の浮石層があるのですからとてもきれいなものでした。

以上私達の巡検の幾分かをお報せしたつもりです。学研的なことにはあまりに負弱ですからその方は三年生の誰かをつかま之てフィールド・ノートを 借りて下さい。優秀なる(?) 三年生のこと、廣岡すれば講義もするでしょう。

金 沢 (昭和35年10月10日-12日)

昭和34年度生

北陸は秋だつた。刈入れも済人で広々と広がる富山平野を通り過ぎて疑の金沢へ列車がすべりこみ、夜気車をあめした我々とは色出した、10月10日、北陸に対する先入観は、お天気でくっが之されて明かるLI空と、一日早く到着された渡辺先生と金沢大学の金崎先生に迎之られて、遠隔の地に素だ

よう万気以したかった、今度の巡検は出発前且まで試験だったため準備不足で、列車の中で一夜漢けの予備知識を貯之ただけなので、我々の概念と朝のラツシュと濁具電車の金沢は、近代文明に浴して以来百年とはい之前町百万石城下町とは、はるかにかけ離れた変様振りであった。それでも金沢平野と流れる犀川と浚野川にはさまれた小立野白地上にある金沢城をかこんで、武家屋敷、寺町、町人町をじが並んでいて、城の前にある日本三庭園のノつである東六公園を皮切りに金崎先生の説明を伺いながらの市内見学は、金木犀の番りにつつまれて優雅なものであった。金沢は、明治維新までは、光じころで摂自地の閉拓も早く、東海の名古屋に分らず発展していた町であったが、対外網像から裏日本の位置になって以来、原料とか交通機関の実から著しい工業化もされずに節前の発展は停滞してしまったのである。城下町のために道路が非合理的なこととが、段丘利用の関係で坂が多いことなども近代化を遅らしている原因のようであった。

必帳の最高の楽しみは夜のおしゃべりで開放された気分で話に花が咲くものである。二年生だけでなく事攻科の玉さんが加わったので、台湾の話や殺すの特技である手相をみてもらったりして時を過した。「洋行の線がでている、」とか「長生きの相ね。」のうちはよかったが「三長結婚するわよ」「あ」三角関係の相がでてるわ」「おや浮気の線よ」などとなると寝られなくなる者がでてくるありさまだった。

翌日も晴れた空に迎えられて河北潟の砂丘見学に出発した。人口の85%が涮業に依存しているのた、戦後字ラインとが樺太帰還問題で漁場がせばめられ、砂丘上の産漑と河北浮の千拓により蔬菜麹蜡に転換してきている内灘地方は試射場問題も忘れたように静かなる村であった。照りつける太陽の下を重い荷物を育負って足がめり込む砂丘を歩くのは楽なものでは左かったが、米車の基地の廃趾のある広々とした白い砂丘と青り海と空にかこまれた我々の行軍の図は、日本商れしていてロマンチツクなほどであった。河北淳千拓が行われている大根布村附近は秋のため、紅白の幕を張りめぐらしたトラツクが「嫁入り道具を積んで行き来していた。このあたりの風習がうかが之るおもしろい光景であった。

砂丘上の土地利用、果樹園地帯をすぎ、宝達の天井川の下をくぐりぬけて 磁たちの汽車は、最も模式的地灘といわれる巨知渦地溝帯に入った。南の石 動山的層屋と此の眉状山断層崖との間は、加って海峡であり、その後の隆起 と断層屋を流下する河川の堆積により陸心したといわれる岩い地形である。 精劇斜面は侵蝕が進んで小さい扇状地が沢山あったが、比側の能登的特徴を 表わした山地は急料面で崖錐が多い。この辺は、能登上布の崖地で家内工業として織物が風人に行われているらしく、小さな工場が沿線に臭々と存在している。と尾市をすぎて和倉に着いた一行は、いよいよ日本海側最大の半島即に入ったわけである。能登は出雲時代の昔から崩発されたので、低地河岸段丘は勿論、山地科面まで前田民以前に水田北ざれていたし、言語風俗も京都方面の影響が強かったといわれている。このように古くかる間形と水上ために、人口の割合に土地が少なくて冬期石ど余剰労仂は出稼ぎとして、乾登社氏、左宮、船員、渙民、小ろ屋などの方面で活躍する。

黄昏はじめた中を和倉駅から宿まで歩いた。道の両側の上手は珪藻土で、 この土を利用した、耐火レンガやコンロの製造工場があちこちにみ之た。

押朝、最後の日まで晴れ上つた天気で、七尾湾内のがきの優殖棚が忘れし トみ之た。和君の岬から半島部をみるヒ、準平原状のなだらかを地形がよく うかが之た、そこから半島の先端である輪島の町に着いたのは昼近かった。 **り期舳倉島で行かれる港士の漢も秋に入って終ったため、海岸にもされほど** 話気はみられなかつたが、この辺の漢葉は始めから商業化されていたことと 無カーの演港として他界の船も入りこみにざわっていた。現在、水産物の大 半は、市場の関係で加工品として出されている。 きたこのあたりで 輪鳥塗り として肩名な滚器も、古くから家内工業として製造されている。 乗しさり丈 大ごは他に類がないとして自慢のものであるが、最近は小松市などの添器と 市場に於いて爭われ、史定していないということであった。輪畠塗りの黄菫 な技術を見学した後に、海岸段年の地形をみるために出かけた。水泳の山中 選手を出した町だけに、海岸には海水プールが設置されているなど、 なかな が熱心な様子がうかがえるのもかもひろかった。帰り道、夕暮れの町には、 タ市が出ていた。有名な朝市に対するもので、タ方は主として魚類を売つて いるということである。道の両側に並んだ露店のひなびたとぎわいの中に立 っていると北陸の中にひたっているような気持になってきた。

その夜、日本海に張り出している半島をもつ石川県の繁栄と工業化と漁業 の発展に期待して、輪島の宿で解散となった。

現地に表て、生活状態などを生のあたりに悪学はしたものの、これという だ問題も見い出せず、単に観光旅行的に終始してしまったことは残念である が、金崎先生を始め現地の方々と接して勉強ができたことはこの上ない牧養 だったと思う。能登は、もう一段是非行きたい場所の一つになった。